

やまなかはやと

山中速人

関西学院大学総合政策学部教授

スタディーツーリズムとしての フィールドワーク ～学生・市民が参加するフィールドワークの意義と課題～

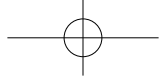
高まるフィールドワークへの関心

フィールドワークという言葉が一般に定着するようになってからは、いつの頃からだろうか。かつてフィールドワークという外来語を翻訳しようとした研究者たちは、フィールドワークのなんたるかを理解できず、「野良仕事」という迷訳をつくり出した時代がウソのようである。昨今は、フィールドワークが大学の正式科目にも取り入れられるようになり、その方法を扱った教科書なども見かけるようになった。

フィールドワークの形態も、現

状を反映して多様化する傾向にある。かつてフィールドワークといえば、たとえば文化人類学や社会学における民族誌(エスノグラフィ)や生活史(ライフヒストリー)、地理学における地誌などを作成するための固有の調査法だとされていた。しかし、社会学者の佐藤郁哉氏がいうように、「フィールドワークとは、参与観察とよばれる手法を使った調査を代表とするような、調べようとすゝる出来事が起きているその「現場」(＝フィールド)に身を置いて調査を行う時の作業(＝ワーク)一般をさす」という捉え方が今日主流である。さらに、最近では、調査だけでなくボランティア

アやNGOなどの社会貢献活動を含める傾向もでていゝる。つまり、フィールドワークとは、研究、教育、社会貢献などを目的とした(教室やオフィスを離れた)野外作業の総体なのだと言つてよい。今日のフィールドワークの特徴は、職業的研究者以外の学生や市民が参加するようになったことだ。その背景には、近年における海外旅行の量的拡大と質的多样化がある。かつては研究者しか関心を示さなかつたような地域や場所で、学生や市民が参加し学習するフィールドワークが、新しい型のツーリズムとして出現するようになった。このような参加学習型の



フィールドワークがスタディーツームと呼ばれる観光形態の全体に占める位置もけつして小さくないだろう。

かくいう私も、ハワイや東南アジアで参加学習型のフィールドワークを始めてから10年余りになる。最近では、その経験を映像化して、初学者向けの教科書も出した。本稿では、そんな私のフィールドワーク経験も踏まえて、「学ぶための旅」のあり方を考えてみたい。

フィールドワークの実際—カウアイ島の日系人二世を訪ねて

参 加学習型のフィールドワークとは具体的にどのようなものか。現在、私がハワイで毎年実施しているフィールドワークを紹介してみたい。

滞在地は、ハワイ諸島カウアイ島南西部にあるワイメアという小さな町である。かつてはサトウキビ・プランテーションの町として栄えたが、今日では、高齢化と過疎化が進んでいる。私たちのフィールドワークの目的は、この町で暮らしてきた日系人二世の老人たちの生活史を聞き取り調査することである。二世たちの多くは、プランテーション労働に従事した日系移民の子孫である。彼らは子ども時代をキャンプと呼ばれる労働者

住宅で過ごし、青年期には、日米戦争による迫害を受けながらも、教育への熱意と仕事への勤勉さで、戦後、飛躍的な社会上昇を果たした。現在、これら二世たちの多くはすでに80歳を超え、人生の最終段階を迎えている。彼ら二世たちの生活史を口述の記録として残すことは、近年活発化しつつある移民研究にとって意義あるだけでなく、日本人の国際化を考える上でも価値ある資料を提供してくれるに違いない。(まあ、こういう口上は、どんな研究にも付いているお題目のようなものだが)

滞在期間は夏期休暇中の約2週間。私と学生合わせて15人位の集団(一般公募の市民が参加する場合もある)が、地元の日系寺院に自炊合宿しながら、その寺院のメンバーでもある二世の老人たちを中心にマン・ツー・マンでインタビューを進める。大半の学生たちにとってカウアイ島は初めての土地である。学生たちは出発前にハワイや日系人の歴史について事前学習をするが、当然、それだけでは不十分で、到着後の数日は島巡りをしたり、博物館や史跡を訪ねたり、老人ホームなどを友愛訪問したり、ハワイ先住民から話を聞いたりして、現地への理解を深める。これまでがいわばスタディーツアーに相当する部分だ。

次に、現地に慣れてくるのを見



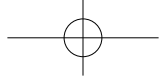
カウアイ島で日系二世から聞き書きをとる学生たち

計らって本格的な聞き取り調査に着手する。お寺の住職(開教使)さんがあらかじめ声を掛けておいてくれた二世の老人たちに学生を引き合わせていく。初回の訪問は私も同行するが、2回目からは学生だけで訪問し、インタビューを行う。インタビュー手法や項目については、出発前にトレーニングをしているが、多くの学生にとっては、おそらく人生で最初のインタビュー経験となる。さいわい多くの二世たちは日本語教育の経験を持ち日本語会話ができるので、学生たちは日系人独特の英語混じりの日本語を聞き取りながら、ゆっくりと(たどたどしく冷や汗をかきながら)調査を進めていくのである。

1日の調査が終わると、地域から届けられた食べ物を感謝を込め



カウアイ島サトウキビ畑で移民二世とともにフィールドワークする学生たち



て全員でいただく。食後は、私から学生1人1人に、聞き落としや事実誤認はないか、老人の気持ちを受け止められているかなど質問をする。さらに、その後、学生たちは夜遅くまで録音テープを何度も再生しフィールドノートを埋めていくのである。こうして1人の学生が1人の日系二世の生活史を仕上げていく。これまでに50余人の生活史が報告書にまとめられた。

フィールドワークがもたらした変化

て、学生参加のフィールドワークを続ける中で、さまざまな変化が生じるようになった。老人たちの側についてみれば、学生たちからインタビューを受けることが、自分自身の人生の価値や意義を振り返る機会を与えたようだ。住職の話では、自分の人生が価値ある人生だったと肯定的に顧みる二世が増えたという。

一方、学生たちについてみると、彼らの人間とりわけ高齢者に対する見方や態度が変わった。今の若者が高齢者に接する機会は少ない。自分の祖父母であっても、これほど真剣にその人生を聞き取ることはない。彼らは異文化の中で生きてきた二世老人たちのユニークな経験を聞き取ることを通して、人生に対する畏敬の念を抱く

ようになった。

私は最初学生たちに「君が歴史を書かなければ、この人の人生は埋もれてしまう。その重大さと責任を自覚して欲しい」と言うことにしている。しかし、そう言うまでもなく、学生たちは自分のしている作業の重要性を理解するようになる。そして、調査終了後も、学生と老人たちの交流は続き、卒業後もカウアイ鳥を訪問したり、亡くなった老人の墓参りをする者も現れるようになった。

今にして思えば、セットされた学習メニューを順次無難にこなすようなスタディーツアーだったら、こうはいかなかつたろう。予期できないハードルを自力で乗り越えたり、他者の人生の深みに触れたりしながら、与えられた使命や課題を達成する過程が学生たちに変化をもたらしたのだと思う。

フィールドワークを通じた「学び」の意義と課題

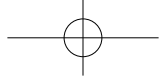
フィールドワークの過程に、個人々が努力しなければ達成困難な課題や挑戦が含まれていることの意味は大きい。私がこれまで実施してきたフィールドワークには、かならずそのような課題を1つ加えてきた。たとえば、カンボジア踏査では、現地のNGOに協力して養蚕用の桑の苗を村に

届ける課題を加えた。私と学生たちは、道中、食中毒や熱中症に苦しみながら悪路に耐え村に桑の苗を届けた。しかし、その後、苗は日照りと食害のために全滅したという。その知らせを受けたとき、学生たちの落胆は言葉にならなかった。しかし、その失敗の厳しい現実から学ぶことの方が、安易な成功体験よりはるかに重要なのだと思う。

スタディーツアーの中には、現地体験や参加学習をうたいながら、現実には、体験や参加が擬似イベント化され、万事つつがなく操作されている場合が少なくない。たとえそれが既存の商業観光にはない経験だったとしても、あ



カンボジア踏査で乾期の砂埃の中トラックの荷台に乗って移動する学生たち



カンボジア踏査で桑の苗を村に届けるボランティア作業に参加する学生たち

らかじめ設定された枠の中の出来事である以上、生き生きとした発見や学びは少ない。その仕組み、た枠を敏感に察知する参加者は、現場に対する謙虚さや緊張感を急速に失ってしまう。こうなると白けたスケジュールの消化が残るだけだ。このことをツアーの企画者は肝に銘じるべきである。

学生や市民が参加するフィールドワークに対して別の批判もある。職業的研究者が行う従来の

フィールドワークが、言語の習得、長期の滞在、人々との継続的な関係を前提とするのに対し、学生や市民が参加するフィールドワークは、言語の習得を伴わず、滞在期間も短期で、人々との関係も一時的であることが多い。これでは、フィールドワークが本来前提としている現地との全面的な関わりが成り立たない。

この批判は重要である。したがって参加者には、職業的研究者のフィールドワークと「素人」のそれとの間には大きな差があることを繰り返し周知しておく必要があるだろう。経験のない素人が単独で実行できるほどフィールドワークは簡単ではない。未熟なフィールドワーカーほど現地にとつて邪魔な存在はなく、お金があるというだけで彼らが世界中を闊歩するならば、それは世界に対する新たな偏見と誤解を産むだけに終わるだろう。その意味でも、現地に精通し経験豊富なフィールドワーカーが導く参加学習型フィールドワークが有意義なのである。そして、やはり若い学生や普通の市民がフィールドワークに参加することの意義は大きい。フィールドワークの魅力に触れた彼らが、将来、優れたフィールドワーカーに育ち、従来の権威的な定説を覆すことだって起こりうるかも知れないからだ。